



# 第96回 フランスの絶対王政

## 1 フランスの絶対王政

- ・フランスでは、1589年にヴァロワ朝が断絶した。  
→同年に（ ）が即位し、（ ）が成立していた。

- ◆（ ）（在位 1610～1643年）
- ・王権が強化されたため、1615年以降（ ）となった。
- ・宰相の（ ）の補佐により、貴族の勢力を抑えた。  
→（ ）という学術研究団体を設立し文化統制も目指した。  
→1635年には、反ハプスブルク家の立場から、カトリック（旧教国）でありながら新教側で（ ）に介入した。



ルイ13世

アンリ4世が、狂信的なカトリックに暗殺されたため、9歳で即位した。22歳でハゲるなど、いろいろ苦勞の多い人である。



宰相リシュリユ

枢機卿としてルイ13世を補佐し、貴族の力を抑えることに尽力した。貴族からの恨みを買うことも多かったという。「国家の敵は私の敵」



映画『三銃士』

デュマの小説『三銃士』では、リシュリユが最大の悪役となっている。写真は1993年にディズニーが制作した映画『三銃士』。

## 2 ルイ14世とその時代



ルイ14世  
華やかな宮廷政治を行ったが、実はいろいろあつて歯が1本もなかった。

- ◆（ ）（在位 1643～1715年）
- ・5歳で即位したため、宰相の（ ）が補佐した。  
→1648年、王権強化に不満を持つ高等法院や貴族が（ ）を起こしたが鎮圧され、王権は絶対的なものとなった。
- ・1648年の（ ）では、神聖ローマ帝国からアルザスなどを獲得し、フランスのハプスブルク家に対する優位を決定づけた。
- ・1659年、スペインとピレネー条約を結び、スペイン王女と結婚した。
- ・1661年、宰相マザランが死ぬと親政をはじめた。  
→王権神授説を主張する（ ）を重用した。  
→「 」と言ったとされ、（ ）と呼ばれた。
- ・パリ郊外に豪華で華麗な（ ）を建設した。  
→（ ）式を代表する宮殿であり、貴族や芸術家が集められた。
- ・（ ）、（ ）、（ ）などが制作した古典主義の戯曲が、ヨーロッパ中で人気となった。



宰相マザラン

当時貴族は、高等法院という司法機関を拠点に、王権拡大に抵抗していた。フロンドの乱は、王権強化をはかるマザランに対する反発から起こった。



ヴェルサイユ宮殿

ルイ14世は、パリから20キロほど離れた場所に、ヴェルサイユ宮殿を建設し、そこに住んだ。晩餐会や舞踏会が毎晩のように行われ、数々のエチケットやテーブルマナーを生み出した。



モリエール

フランス古典主義を代表する喜劇作家。40歳の時に20歳年下の女性と結婚したが、「実の娘だったのではないか？」という疑惑がある。



財務総監コルベール  
コルベール主義とも評される重商主義政策を押し進めた。その資金で、ルイ14世は戦争を行った。

### 3 ルイ14世時代の対外進出

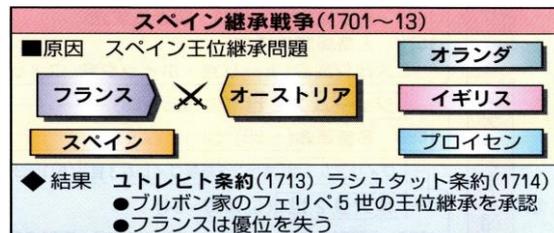
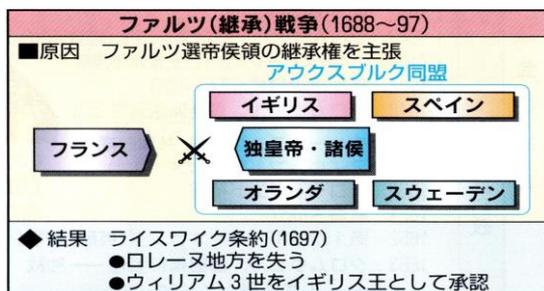
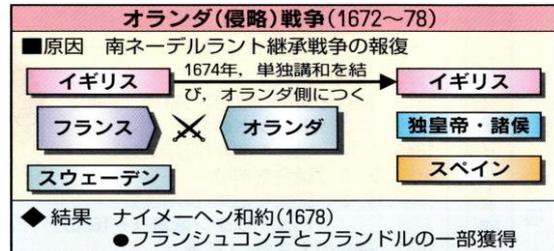
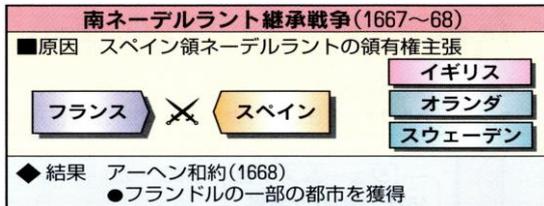
- 財務総監に（ ）を起用して財政をととのえ、イギリスやオランダに対抗して重商主義をおしすすめた（貿易差額主義）。  
→王立マニュファクチュアを設立し、毛織物を生産・輸出した。

- コルベールは（ ）を再建し、海外進出を行った。  
→インドでは（ ）や（ ）を拠点とした。
- ラ=サールは、北アメリカに（ ）植民地を建設した。

### 4 ルイ14世時代の侵略戦争と財政難

- ルイ14世は、領土の拡大を狙って自然国境説を主張し、対外侵略を始めた。  
→（ ）、（ ）、（ ）などの戦争に介入した。

- 1700年、ハプスブルク家のスペイン王カルロス2世が、後継ぎを残さずに死んだ。  
→ルイ14世はスペイン王位を狙い、（ ）を起こした。  
→1713年、（ ）によって戦争はほぼ終結した。  
→ルイ14世の孫の（ ）がスペイン王となることが承認された。  
※ただしニューファンドランド・アカディア・ハドソン湾地方をイギリスに譲った。  
→1714年、ラシュタット条約でスペイン継承戦争は完全に終了した。



- 相次ぐ侵略戦争により、フランスは極度の財政難となった。
- 1685年、（ ）により、ユグノーの国外流出を招いた。  
→フランスの産業発展を阻害し、財政にさらなる打撃を与えた。



ルイ15世  
ルイ14世のひ孫。  
愛人の政治介入を許し、政治は乱れた。

- ◆（ ）(在位1715~1774年)  
・イギリスとの植民地戦争を続けたがうまくいかず、財政難に苦しんだ。